

Title	「水戦」の思想：銀雀山漢墓竹簡「十陣」
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2015, 60, p. 73-91
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/58733">https://doi.org/10.18910/58733</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 「水戦」の思想

— 銀雀山漢墓竹簡「十陣」 —

湯浅邦弘

### 序言

二〇一〇年一月、『銀雀山漢墓竹簡「貳」』（銀雀山漢墓竹簡整理小組、文物出版社）が刊行された。本稿では、そこに収録された「十陣」という文献を取り上げ、その兵学思想の意義について検討を加えたい。「十陣」は、文字通り、十の陣形について説く文献であるが、その中の「水陣」は中国兵学思想史の展開を考える上で、極めて重要であると思われる。なぜなら、中国の戦争は、古来、陸上戦を基本としており、戦車や歩兵・騎兵をいかに運用するかという思考は多く見られるものの、「水戦」についてはまとまった考察がないと感じられる

からである。以下では、この「十陣」の全体像を確認した後、その水陣、水戦の意義について検討してみたい。

#### 一、銀雀山漢墓竹簡の再検討

『銀雀山漢墓竹簡「貳」』は、第一輯でその刊行が予告されていたとは言え、ほとんど何の前触れもなく、突然公開された。それは、一九七二年の銀雀山漢墓竹簡の発見から三十七年後、『銀雀山漢墓竹簡「壹」』の刊行から二十四年後のことであった<sup>(注1)</sup>。

その内容は、第一輯で予告されていた「佚書叢残」に該当するもので、全体は、「論政論兵之類」「陰陽時令・占候之類」「其他」の三部に類別されている。ここで注

目されるのは、「論政論兵之類」の中に、かつて『孫臏兵法』に分類されていた諸篇が存在する点である。以下に、「論政論兵之類」の目次を掲げるが、この内、☆印のついている篇は、かつて『孫臏兵法』下篇とされていたものである。また、【】で表示しているものは、竹簡に篇題が記されておらず、整理者が内容に基づいて付けた仮称である。

☆将敗、☆【将失】、☆兵之恒失、王道、五議、效賢、為国之過、務過、觀卑（注）、持盈、分士、三乱三危（以上、『銀雀山漢墓竹簡』第三輯に収録予定の「篇題木牘」に篇名が記されているという十二篇）

地典、☆客主人分、☆善者、☆五名五恭、起師、☆奇正、☆将義、觀法、程兵、☆【将德】【将過】、【曲将之法】、☆【雄牝城】、☆【五度九奪】、☆【積疏】、【選卒】、有国務過、十官、患之、六拳、四伐、亡地、五議、【君臣問答】、【郭偃論士】、【民之情】、【有国之効】、【有主以為任者】、【自危自忘】、【国法之荒】、【聽有五患】、聽在民利、☆十陣、☆十問、☆略甲、万乘、富国、三算

当初、『孫臏兵法』の釈文が公開された時、上篇は、概ね齊の威王と孫子（孫臏）との問答、田忌と孫臏との問答、および「孫子曰」で始まる諸篇によって構成されていたので問題はなかったが、下篇については、必ずしも孫臏の兵法だと確信させるような証拠がなかった。そこで今回の再整理により、かつて『孫臏兵法』下篇として扱われていた諸篇が、改めて見直され、「論政論兵之類」五十篇中の一編として再編されたのである。

これにより、我々は、上記の☆印の付いた諸篇を再考する必要に迫られた。これらが『孫臏兵法』であるという先入観を棄てて、改めて、その時代性や思想的意義について考察しなければならなくなったのである。

そこで、本稿では、この内の「十陣」を取り上げたい。従来、『孫子』と『孫臏兵法』とを比較して、『孫臏兵法』では、陣法・陣形に関する思索が深まっている、との評価があった。確かに、この「十陣」はその名が示すとおり、十の陣形について説くものである。しかし、その内訳や思想的意義については、これまで十分に解明されているとはいえない。

まずは、『銀雀山漢墓竹簡「貳」』の写真版および釈文に基づいて、「十陣」を釈読するところから始めてみたい。

## 二、銀雀山漢墓竹簡「十陣」釈読

便宜上、全体を二部に分けると、まず、前半冒頭に、総論に該当する部分が配置されている。ここでは、十の陣形の名称が列挙される。釈文と現代語訳を掲げてみよう(注3)。

### 十陣(注4)

・(注5) 凡陣有十。有方陣、有圓陣、有疏陣、有數陣、有錐行之陣、有雁行之陣、有鈎行之陣、有玄襄之陣、有火陣、有水陣。此皆有所利。方陣者、所以剽也。圓陣者、所以搏也。疏陣者、所以「口+犬」也。數陣者、爲不可剽。錐行之陣者、所以決絶也。雁行之陣者、所以接射也。鈎行之陣者、所以變質易慮也。玄襄之陣者、所以疑衆難故也。火陣者、所以拔也。水陣者、所以偃固也。

およそ陣には十種類がある。方陣、円陣、疏陣、數陣、錐行之陣、雁行之陣、鈎行之陣、玄襄之陣、火陣、水陣である。みなそれぞれに利点がある。方陣は兵を効率よく分割することができる。円陣は、兵を集結するこ

とができる。疏陣は兵を散開させることができる。數陣は「多くの小陣が連携して」分断されないようにするための陣である(注6)。錐行之陣は「錐の如く突進して」敵を切断することができる。雁行之陣は、「敵を呼び込み包囲して」弓矢を接射することができる。鈎行之陣は、自在に変化し柔軟に計画を変更することができる。玄襄之陣は敵の士卒を惑わせ進軍を阻止することができる。火陣は「火で」敵陣を覆い尽くして奪うことができる。水陣は「水運を利用して」敵の守備を混乱させることができる。

これに続く後半部は、各陣について個別の説明が記されている。

・方陣之法、必薄中厚方、居陣在後。中之薄也、將以「口+犬」也。重□其□、將以剽也。居陣在後、所以……

### 【圓陣之法】……

【疏陣之法】、其甲寡而人之少也、是故堅之。武者  
在旌旗、是人者在兵。故必疏鉅間、多其旌旗羽  
旄、砥刃以爲旁。疏而不可蹙、數而不可軍者、在  
於慎。車母馳、徒人毋趨。凡疏陣之法、在爲數  
醜、或進或退、或擊或「豕+頁」、或與之征、或

要其衰。然則疏可以取銳矣。

數陣之法、毋疏鉅間、威而行首積刃而信之、前後相保、變□□□、甲恐則坐、以聲坐□、往者弗送、來者弗止、或擊其迂、或辱其銳、筭之而無間、「軍+反」山而退。然則數不可掇也。

・ 鉅行之陣、譬之若劍、末不銳則不入、刃不薄則不剽、本不厚則不可以列陣。是故末必銳、刃必薄、本必鴻。然則鉅行之陣可以決絕矣。

【雁行之陣】、……中。此謂雁陣之任。前列著「有+雍」、後列若狸、三……□□□闕羅而自存、此之謂雁陣之任。

鉤行之陣、前列必方、左右之和必鈎。三聲既全、五彩必具、辨吾號聲、知五旗。無前無後、無……

・ 玄「羽+襄」之陣、必多旌旗羽旄、鼓「羽+非」  
「羽+非」莊、甲亂則坐、車亂則行、已治者□、  
楹榼碎碎、若從天下、若從地出、徒來面不屈、終日不拙。此之謂玄「羽+襄」之陣。

但し、以下の火陣と水陣については、「火戦之法」「水戦之法」と言い換えられているので、その部分についてのみ釈文と現代語訳を掲げる。

・ 火戦之法、溝壘已成、重爲溝壘、五步積薪、必均疏數、從役有數、令之爲屬牝、必輕必利、風辟……□火既自覆、與之戰弗克、坐行而北。火戦之法、下而行以「艸+外」、三軍之士无所出泄。若此、則可火也。凌森蔣「艸+外」、薪蕘既積、營窟未謹。如此者、可火也。以火亂之、以矢雨之、鼓譟敦兵、以勢助之。火戦之法。

・ 水戦之法、必衆其徒而寡其車、令之爲鈎楛菴相貫輯□絳皆具<sup>(注7)</sup>。進則必逐、退則不覺、方蹙從流、以敵之人爲招。水戦之法、便舟以爲旗、馳舟以爲使、敵往則逐、敵來則覺、推攘因慎而飭之、移之革之、陣而支之、規而離之。故兵有誤、車有御、徒必察其衆少、擊舟「豕+頁」津、示民徒來。水戦之法也。七百八十七<sup>(注8)</sup>。

火戦の法は、堀と土塁ができあがると、さらにそれに重ねて塹壕を造り、五歩ごとに薪を積んで必ずその密度を均等にす。作業に従事する人数を制限し、彼らに防禦の柵を作らせる。必ず軽装で迅速にし、風は……を避ける。火がすでに燃え広がり、戦っても勝てない時は、身を低くして逃亡する。火戦の法は、風下に「艸+外」(草木)が広がり、全軍の士卒が脱出できない。このよ

うな時には火攻めにするべきである。大風を凌いで蔣「艸＋外」（マコモや草木）が茂り、薪や柴草がすっかり積み上げられていて、陣営はまだ整っていない。このよ  
うな時には、火攻めにすべきである。火をかけて敵を乱し、矢を雨のように射かけ、太鼓を威勢良く鳴らして兵の士気を高め、勢いによってこれを助ける。これが火戦の法である。

水戦の法は、必ずその歩兵を多くして戦車を少なくし、それを曲がった形や真つ直ぐな形に並ばせ、菴租は重ねて集め、□絳は皆備える。敵が進攻してくれば必ずこちらにも応戦し、敵が退けばこちらから迫ることはしない。敵に迫る場合には水の流れに従い、敵の兵を目標にする。水戦の法は、便舟を旗艦とし、馳舟を伝令の船とする。敵が進めばこちらにも進撃し、敵が来襲すれば、こちらにも応戦する。敵を追い払ってから慎重に自軍を整備し、場所を移して「隊列を」変化させ、陣立てをして支？し、敵情を窺って適度に距離を保つ。そのため、軍隊は鋤を携行し、戦車には車夫が随行する。士卒は敵の多少を察知し、舟を襲撃して船着き場を占拠し、民に歩兵の来攻を知らせる。これが水戦の法である。

ここで最も注目されるのは、「水陣」「水戦の法」である。これは、単なる渡河作戦ではなく、水（河）の流れ

を重視した上で、「便舟」「馳舟」という船舶の種類を提示している。また、陸上歩兵・戦車についても、この水戦を想定した準備を促しており、さらに、船着き場の占拠と（水流を熟知した）民の動員を重視している。

後述のように、『孫子』には、「火攻」という特殊戦術についての記述はあるが、水戦については特に言及されていない。よって、「十陣」における「水陣」の意義を再考してみる必要が生じたと見えよう。そこで改めて、『孫子』『孫臏兵法』における「水陣」「水戦」について確認してみよう。

なお、「十陣」の成立時期について、「十陣」の記述の中には、それを特定できるような根拠（例えば時代を明示する固有名詞、特殊用語など）がない。但し、「論政論兵之類」の他の諸篇と概ね同時期であったと仮定すれば、それは戦国時代後半期であったと推測される<sup>（注9）</sup>。

### 三、『孫子』兵法と「水」

中国古代において「水戦」は、春秋時代の伍子胥に始まるとされる。『越絶書』（佚文）には次のような記載がある。

・越絶書曰、伍子胥水戦法、大翼一艘、廣丈六尺、長十二丈、容戰士二十六人、棹五十人、舳艫三人、操長鉤矛斧者四、吏仆射長各一人、凡九十一人。當用長鉤矛、長斧各四、弩各三十二、矢三千三百、甲兜鍪各三十二。（『太平御覽』卷三一五「水戦」所引）

・越絶書曰、闔閭見子胥、敢問船運之備何如。對曰、船名大翼、小翼、突冒、樓船、橋船。今船軍之教、比陵軍之法、乃可用之。大翼者、當陵軍之車。小翼者、當陵軍之輕車。突冒者、當陵軍之沖車。樓船者、當陵軍之行樓車也。橋船者、當陵軍之輕足剽定騎也。（『太平御覽』卷七七〇「舟下」所引）

・越絶書曰、吳王闔閭問伍子胥軍法。子胥曰、王身將、即疑舡旌麾兵戟與王舡等者七艘、將軍疑舡兵戟與將軍舡等三舡、皆居於大陣之左右。有敵、即出就陣、吏卒皆銜枚、敖歌擊鼓者斬。（『太平御覽』卷三五七「銜枚」所引）

楚から呉に亡命した伍子胥は、陸上の戦車戦をモデルとして水軍を編成した（注10）。「大翼」「小翼」などの編成があったとされているが、その運用の詳細や水戦の戦術

については記載がない。

ただ、水戦と言えば伍子胥というイメージは、その後定着して行ったようで、唐の李筌撰『太白陰経』水戦具篇は、中国古代の戦争を振り返り、「水戦之具、始自伍員以舟爲車、以楫爲馬」と説く。

この伍子胥の時代こそ、孫武の活躍した春秋時代末期に相当する。孫武・伍子胥が軍師を務めた呉は、南方の強国であり、呉越・呉楚の戦争は長期にわたった。しかし、周囲は湿地帯や河川が多く、従来の中原の戦争に見られた形態、すなわち大平原を舞台とした戦車戦は、必ずしも適合しなかった。そこで、『孫子』も、主として機動力に優れる歩兵を念頭に置いて戦術を提示している。

また、『孫子』には、以下のように、「陣」または「陳」に関する記述はあるが、漠然としたもので、恐らく陸上戦を前提としているであろう。

・無邀正正之旗、勿擊堂堂之陳、此治變者也。（『孫子』軍争篇）

・輕車先出居其側者、陳也。無約而請和者、謀也。奔走而陳兵者、期也。半進半退者、誘也。（『孫子』行軍篇）



一方、『孫子』には、特殊戦術を説く火攻篇がある。しかし、水戦に関する記述は見られない。

さらに、「水」への注目はあるが、それは、水の持つエネルギーや水の如く軍隊が柔軟無形であるべきことを説いたものである。水戦や水陣を説くものではない。

・勝者之戦民也、若決積水於千仞之谿者、形也。  
（『孫子』形篇）

・激水之疾、至於漂石者、勢也。鷲鳥之疾、至於毀折者、節也。是故善戰者、其勢險、其節短、勢如彊弩、節如發機。（『孫子』勢篇）

・夫兵形象水、水之形、避高而趨下。兵之形、避實而擊虛。水因地而制流、兵因敵而制勝。故兵無常勢、水無常形。能因敵變化而取勝者、謂之神。  
（『孫子』虛実篇）

但し、以下のように、川や沼沢地での戦いに対する留意点を説いた部分はある。しかしこれも、あくまで陸上戦を前提としており、船舶や水戦具に関する記述はない。

孫子曰、凡處軍相敵、絶山依谷、視生處高、戰降無

登、此處山之軍也。絶水必遠水、客絶水而來、勿迎之於水内、令半渡而擊之利。欲戰者、無附於水而迎客。視生處高、無迎水流。此處水上之軍也。絶斥澤、惟亟去無留。若交軍於斥澤之中、必依水草、而背衆樹。此處斥澤之軍也。（『孫子』行軍篇）

ここでの主旨は、渡河の後にはすぐに川から遠ざかること。敵が渡河してきたら、それを川の中で迎撃せず、その半分を渡らせてしまつてから撃つこと。戦闘の際には、川の付近で敵と戦つてはならないこと。できるだけ高地に陣取り、川の下流にいて上流からの敵に当たつてはならないこと、である。これが「水上」（川のほとり）にいる軍隊の要諦であるという。また、沼沢地を越える際には、できるだけ迅速に通過すること。やむを得ず沼沢地での戦闘となつた場合には、必ず飲料水と飼料の草のあるそばで森林を背後にして陣立てをすることが肝要であると説く。

さらに、以下のように、布陣する場合には、高地や日当たりの良い所を選び、その高地が軍の右後方に位置するようにすべきだと説く。湿地は好ましくないという意識が窺えるが、渡河する場合にも、上流で降雨があり、激流となつている場合には、その流れが落ち着くのを待



てと説く。

凡軍好高而惡下、貴陽而賤陰、養生而處實、軍無百疾、是謂必勝。丘陵隄防、必處其陽而右背之。此兵之利、地之助也。上雨水沫至、欲涉者、待其定也。

(『孫子』行軍篇)

総じて、『孫子』は、火と水を対比して、火の方に、戦力としての優位性を見る。

故以火佐攻者明、以水佐攻者強。水可以絶、不可以奪。(『孫子』火攻篇)

それは、火攻めが比較的簡易な準備で即効性を持つのに対して、水攻めは、河を堰き止めたり決壊させたり、敵の城邑を水で困んだりするなどの大規模な土木工事を必要とし、さらに、それによって敵を分断することはできて、迅速に敵陣を奪取することが困難だからである。『孫子』において、水戦や水陣に関する記述が見られないのは、こうした水攻めに対する低い評価が影響しているからであろう。

#### 四、『孫臏兵法』と陣法

それでは、次に『孫臏兵法』を確認してみよう<sup>(注1)</sup>。従来の研究では、『孫子』に比べて『孫臏兵法』は、陣形・陣法に関する思索が深まっていると評価されてきた。確かに、『孫臏兵法』(旧『孫臏兵法』上篇)では、陣形・陣法に関する記述が散見し、『孫子』と比較した場合の大きな特徴となっている。

まず、威王問篇には、「錐行」「雁行」「飄風之陣」などの陣について、斉の將軍田忌と孫子(孫臏)の問答が見える。この内、錐行の陣は、錐のように先のがった布陣で、敵の堅陣に穴をあげ鋭い部隊を破壊するもの。雁行の陣は、横に展開した雁の列のような布陣で、敵の側面を襲撃するためのものと説明される。飄風の陣は、文字通りの意味は、つむじ風のような陣ということになるが、竹簡の断裂のため、具体的な内容は未詳である。いずれにしても、この問答が一定の史実に基づくものだったとすれば、すでに將軍田忌の側にも、こうした各種陣形についての一定の認識があったと推測される。

田忌問孫子曰、錐行者何也。雁行者何也。纂卒力士

者何也。勁弩趨發者何也。飄風之陣者何也。衆卒者何也。孫子曰、錐行者、所以衝堅毀銳也。雁行者、所以觸側應□【也】。纂卒力士者、所以絕陣取將也。勁弩趨發者、所以甘戰持久也。飄風之陣者、所以回□□□【也】。衆卒者、所以分功有勝也。（『孫臏兵法』威王問篇）

次に、八陣篇では、敵情と地形に基づいて八陣を運用すべきことを説く。「因地之利、用八陣之宜」とあるように、地勢の有利な所を利用して八陣を活用すべきことが説かれている。具体的には、戦闘は三分の一、待機は三分の二。三分の一で敵軍に侵入し、残りの二で収束を図るといふ。また、戦闘に参加する戦車と騎兵は三つに分け、一隊は右、一隊は左、一隊は後尾に置くとする。さらに、地形が平坦な場合は、味方の戦車を多くし、地形が險阻な場合は、味方の騎兵を多くし、両側が高く迫った所では味方の弩を多くする、と説く。いずれにしても、陸上戦が前提となっている。

孫子曰、用八陣戰者、因地之利、用八陣之宜。用陣三分、誨陣有鋒、誨鋒有後、皆待令而動。鬪一、守二。以一侵敵、以二收。敵弱以亂、先其選卒以乘

之。敵強以治、先其下卒以誘之。車騎與戰者、分以爲三、一在於右、一在於左、一在於後。易則多其車、險則多其騎、厄則多其弩。險易必知生地、死地、居生擊死。（『孫臏兵法』八陣篇）

一方、地葆篇では、渡河作戦を「不勝」の戦法とする。河を渡ること、丘陵に向かって布陣すること、河の流れに逆らっていくこと、殺地（非常に不利な地）にいくこと、樹木で敵の様子が見えない森林に向かっていくこと。これらはどれも勝てない軍事行動だと説く。また、川の位置と流れについての留意点を記す。東に流れる川は生水（生き川）であるが、北に流れる川は死水（死に川）、流れない川も死川だと説く。

絶水、迎陵、逆流、居殺地、迎衆樹者、鈞擧也、五者皆不勝。南陣之山、生山也。東陣之山、死山也。東注之水、生水也。北注之水、死水。不流、死水也。（『孫臏兵法』地葆篇）

その他、官一篇では、戦況に応じた陣形として、索陣、囚逆、雲陣、羸渭、方、封、圜、喙逢、陽削、奮国、山胫、透迤、雁行、雜管、蓬錯、曲次など多くの名

が見える。但し、その詳細が不明のものもある。また、「襲國邑以水則（國邑を襲うには水則を以い）<sup>もち</sup>」のように、城邑の水攻めと思われる記述があるが、水戦（川の中での戦い）を前提としたものではない。

邁軍以索陣、菱肆以囚逆、陳師以危□、射戰以雲陣、御裹以羸渭、取喙以闔燧、即敗以包□、奔救以皮傳、燥戰以錯行。用□以正□、用輕以正散、攻兼用行城、□地□□用方、迎陵而陣用封、險□□□用圍、交易武退用兵、□□陣臨用方翼、泛戰接厝用喙逢、囚險解谷以□遠、草駟沙茶以陽削、戰勝而陣以奮國、而……爲畏以山胙、秦佛以透迤、便罷以雁行、險厄以雜管、還退以蓬錯、繞山林以曲次、襲國邑以水則、辯夜退以明簡、夜警以傳節、厝入內寇以楛士、遇短兵以必輿、火輪積以車、陣刃以錐行、陣少卒以合雜。合雜、所以御裹也。脩行連削、所以結陣也。雲折重雜、所權越也。森凡振陳、所以乘疑也。隱匿謀詐、所以釣戰也。龍隋陳伏、所以山鬪也。（『孫臏兵法』官一篇）

以上のように、『孫臏兵法』では、確かに多様な陣形に関する記述は見られるものの、水陣・水戦に関するま

とまった思索は見られない。基本的には陸上戦を前提としていることが分かる。従って、銀雀山漢墓竹簡「十陣」については、やはり、水戦に関する記述がその最大の特色になると言えよう。

もっとも、「十陣」における「水戦」も、大艦隊同士 of 決戦を説くというものではない。あくまで、陸上部隊と連携しつつ水上での戦闘を行い、攻守ともに有利な態勢を築こうとするものに過ぎない。「水戦」と聞いて三国時代の赤壁の戦いのような艦隊決戦を連想するのは早計と言えよう。

その理由として考えられるのは、こうした水戦がそもそもどのような形で発生したかという問題である。古代中国における水戦は、はじめから水上での艦隊決戦を企図して登場した戦術ではなく、兵力輸送の際の偶発的な武力衝突によるものであったという可能性を指摘できよう。『孫子』や『孫臏兵法』が説くように、水上や湿地帯は戦場として相応しくない。しかし、そうした場所を避けて通れない場合、兵員・物資・武器等をいかに迅速に移送するかという問題が発生したと考えられる。それを解決するものが、船舶による移送であったと推測される。そして、両軍が同時にこれを実行した場合、水上における接触・衝突が偶然に発生し、やむを得ず水戦に

なつたのではなからうか。

仮に、これが水戦の発生原因だったとすれば、銀雀山漢墓竹簡「十陣」における「水戦」も、その延長戦上にあったと考えて良いかも知れない。しかしながら、「十陣」では、予め船舶の種類を二つ指摘し、水戦の準備を促している。偶然に輸送船同士が接近した場合にどう戦うかというのではなく、水流を利用した積極的な水戦を主張しているのである。銀雀山漢墓竹簡「十陣」の「水戦」は、船舶の偶発的接近・衝突という段階からはもう少し進んだ水上戦を想定し、その具体的戦術を説いていると言えよう。

それでは、他の兵書ではどうであろうか。以下では、『孫子』『孫臏兵法』以外の兵書にも視野を拡大して、この点を明らかにしてみたい。

## 五、兵書と水戦

まず、新出土文献『曹沫之陳』を取り上げる。一九九四年に上海博物館が購得した上博楚簡は、『上海博物館藏戰国楚竹書』として公開が進められているが、『曹沫之陳』はその第四分冊（二〇〇四年十二月）に収録された資料である。『曹沫之陳』は、斉に領土を奪われたの

に失地回復に努めることなく音楽にふけていた魯の莊公（在位前六九三～前六六二）が、曹沫の勧めに従って斉との戦いを決意し、曹沫に対して具体的な陣法を次々に問い、曹沫がそれに答えるという内容である<sup>〔注1〕</sup>。『孫子』に先行するかもしれない兵書として注目される。

莊公又問、爲和於陳如何。答曰、車間容伍、伍間容兵、貴有常。凡貴人思（使）處前位一行、後則見亡。進必有二將軍、母將軍必有數辟（嬖）大夫、母俾（嬖）大夫必有數大官之師、公孫公子。凡有司率長、伍之間必有公孫公子、是謂軍紀。五人以伍、萬人……（『曹沫之陳』）

これによれば、『曹沫之陳』の兵法は、中原（中国の中央部。黄河の中流から下流地域）で行われていた戦車中心の戦争形態を前提としている。戦争の目的は、失地の回復であるから、戦場は国境付近に限定され、戦闘の期間も短い。敵国領内の奥深くに進攻したり、長距離進撃した部隊に物資を補給するなどの局面は想定されていない。

これを『孫子』と比較すると、逆に、『孫子』の先進性が際だって見えよう。『孫子』は、戦車が疾走しにく

い長江流域の湿地帯を前提に、大量の士卒を巧みに操作する「詭道」の重要性を説いた。戦車の正面対決では考えられなかった謀攻（謀略による攻撃）こそ、戦争の本質だと説いたのである。

ただ、いずれにしても、『孫子』『曹沫之陳』とも、水戦については想定していない。特に、『曹沫之陳』は、基本的には西周時代の会戦（戦車戦）を前提としており、水に関する要素は全く見えない。

次に、「孫呉の兵法」と並び称される『呉子』について確認してみよう。『呉子』では、一部、水戦に関する記述が見られるが、それは、敵の渡河作戦において、敵が河を渡りきる前に攻撃をしかけよとするもので、『孫子』行軍篇の主張と同様である。自軍の水戦・水陣を説くものではない。

武侯問曰、若遇敵於谿谷之間、傍多險阻、彼衆我寡爲之奈何。起對曰、諸丘陵林谷深山大澤疾行亟去勿得從容。若高山深谷卒然相遇必先鼓譟而乘之。進弓與弩且射且虜審察其政、亂則擊之勿疑。（『呉子』心変篇）

ここで魏の武侯は、敵と溪谷で遭遇し、かつ、敵が多

勢で味方が少数である場合を想定して、呉起に質問している。これに対して、呉起は、そもそも丘陵や森林、溪谷、深い山、大きな沼沢地などは素早く通過して、滞留すべきではないとしている。基本的には、湿地帯や川を避けようという意識が濃厚である。

武侯問曰、左右高山地甚狹迫卒遇敵人、擊之不取去之不得爲之奈何。起對曰、此謂谷戰、雖衆不用。募吾材士、與敵相當輕足利兵以爲前行、分車列騎隱於四傍相去數里、無見其兵敵堅陣進退不敢。於是出旌列旆行出山外營之。敵人必懼、車騎挑之勿令得休。此谷戰之法也。（『呉子』心変篇）

次に、武侯は、左右が高い山で、土地が非常に狭隘な所で、突如、敵と遭遇した場合について質問する。これに対して、呉起は、それは「谷戦」であると定義した上で、多数の兵士がいても役に立たないので、武術に優れた少数精鋭で応戦すると説く。また、「軽足利兵」（素早く走れる者、武器を巧みに使える者）を先鋒とし、機動力に劣る戦車や騎兵は分割して、四方に隠しておくと言ふ。但し、これは、両側に高い山が迫るような土地での戦いで、谷川の中での戦いを想定しているのではない。

武侯問曰、吾與敵相遇大水之澤傾輪沒轅水薄車騎舟楫不設進退不得爲之奈何。起對曰、此謂水戰、無用車騎且留其傍、登四望必得水情、知其廣狹及其淺深、乃可爲奇以勝之。敵若絕水半渡而薄之。(『吳子』応変篇)

さらに武侯は、湿地帯にはまり込み、戦車も騎兵も水浸しという状態で、舟の準備もなく、進退窮まった場合について質問する。これに対して、呉起は、それを「水戦」と定義した上で、戦車や騎兵は役に立たないので、まずは高地に登って水の状態を観察し、水の広がつている所、狭くなっている所、水深の浅い所、深い所を把握した後に、策謀をめぐらして敵の不意を突くと説いている。そして、もし、敵が水の中を渡ってきた時には、半ばまで至った時に攻撃せよと説く。

「半渡而薄之」は、敵の渡河作戦に対する心得であり、すでに『孫子』にも見えていた。しかし、こうした沼沢地・水地において、呉起は、特に具体的な手立てを説いているわけではない。要するに、水にはまり込んだら、その状態をよく観察し、策謀をめぐらせというだけである。予め舟や武器を用意し、積極的に水戦を仕掛ける、などという思想ではない。「水戦」という用語を明確に

提示した点は注目されるが、銀雀山漢墓竹簡「十陣」に見えるような具体的な水戦を説くものではなからう。

この『呉子』から少し成立が遅れると思われる『尉繚子』では、どうであろうか<sup>15)</sup>。

・梁惠王問尉繚子曰、黃帝刑德、可以百勝、有之乎。尉繚子對曰、刑以伐之、德以守之、非所謂天官時日陰陽向背也。黃帝者、人事而已矣。(『尉繚子』天官篇)

・按天官曰、「背水陣為絶地、向阪陣為廢軍」。武王伐紂、背濟水向山阪而陣、以二萬二千五百人、擊紂之億萬而滅商、豈紂不得天官之陣哉。(『尉繚子』天官篇)

梁の恵王は、黃帝が百戦百勝できたのは、「刑德」(呪術的兵法)によるのではないかと質問する。これに対して、尉繚子は、戦争の勝敗は、あくまで「人事」を尽くすことにあると説く。そして、「天官」の説によれば、背水の陣は「絶地」(敗北を招く地)の陣形だとされているが、周の武王が殷の紂王を伐った時は、濟水を背にし山を前にして布陣しながら勝利したと説く。ここでは、背水の陣が、基本的には不利な陣形であるという認



識が示されるが、それでも最終的な勝敗は「人事」にかかっていると説くのである。

また、『尉繚子』では、『孫子』と同じように、「水の柔軟性に注目する記述がある。

勝兵似水、夫水至柔弱者也、然所以觸、丘陵必爲之崩、無異也、性專而觸誠也。今以莫邪之利、犀兕之堅、三軍之衆、有所奇正、則天下莫當其戰矣。（『尉繚子』武議篇）

ここでは、水の柔軟性に先ず注目し、勝兵も水の如く、自在に変化すると説く。また一方、水のエネルギーにも注目する。水は極めて柔弱なものであるが、時には丘陵をも崩壊させるような力を持っているというのである。こうした水への注目は、『孫子』同様である。

このように、『尉繚子』でも、基本的には、陸上戦が想定されており、水は、あくまで軍隊の柔軟性や勢いを表す比喩として使われていたことが分かる。

次に、『武経七書』の一つ『六韜』はどうであろうか。

奇技者、所以越深水、渡江河也。強弩長兵者、所以踰水戰也。（『六韜』龍韜・奇兵篇）

この奇兵篇では、様々な用兵術が論じられているが、その中で、「奇技」（奇抜な技術や方法）は深い水（堀）を越え、大河を渡る手段だとされている。また、「強弩長兵」（強力な弩や長い槍）は、川を越えてくる敵を防ぐ武器だという。これらは、自軍および敵軍の渡河作戦が念頭に置かれている。しかし、以下のように、基本はやはり陸上戦であり、しかも見晴らしのきく高地がよいとされる。渡河はあくまで特殊例外的な作戦なのである。

處高敵者、所以警守也。保險阻者、所以爲固也。（『六韜』龍韜・奇兵篇）

最後に、「武経七書」の中で最も成立の遅れる『李衛公問对』を確認してみよう。

太宗曰、高麗數侵新羅。朕遣使諭、不奉詔、將討之、如何。靖曰、探知蓋蘇文、自恃知兵謂中國無能討、故違命、臣請師三萬擒之。太宗曰、兵少地遙、以何術臨之。靖曰、臣以正兵。太宗曰、平突厥時、用奇兵。今言正兵、何也。靖曰諸葛亮七擒孟獲、無他道也。正兵而已矣。（『李衛公問对』卷上）



その冒頭、唐の太宗は、高麗遠征に際し、「兵少地遙」という状況であるから、奇策が有効ではないかと考えて李靖に下問している。これは、次のような事情を踏まえている。貞觀十八年（六四四）の第一次高麗征伐では、唐は水陸兩軍を準備し、李靖指揮の歩兵騎兵および募兵は計六万、平壤道行軍大総管張亮率いる水軍は約四万。別に長安洛陽の募兵三千、戦艦四百艘。総計二十万の大軍であったが、長安から平壤までは約三千里余の行程である。太宗はこうした状況から、正攻法では勝利が難しいのではないかと考えたわけである。しかし、李靖は、諸葛孔明の「七擒孟獲」の時でさえも、実は「正兵」によつていたのだと断言する。

そして以下、『李衛公問对』で論述されるのは、専ら陸上戦を前提とした陣法である。例えば、以下に記される「八陣」「六花陳法」などの陣法については、必ずしもその実態は明らかではないが、李靖は、それらが呪術的なものではないと説いている。

・太宗曰、陣數有九、中心零者、大將握之。四面八向、皆取準焉。陳間容陳、隊間容隊、以前爲後、以後爲前、進無速奔、退無遽走。四頭八尾、觸處爲首、敵衝其中、兩頭皆救。數起於五、而終於

八。此何謂也。靖曰、諸葛亮以石縱橫布爲八行。方陣之法、即此圖也。臣嘗教閱、必先此陣。世所傳握機文、蓋得其粗也。（『李衛公問对』卷上）

・太宗曰、天地風雲龍虎鳥蛇、斯八陣、何義也。靖曰、傳之者誤也。古人祕藏此法。故詭設八名耳。八陳本一也。分爲八焉。若天地者、本乎旗號、風雲者、本乎旛名。龍虎鳥蛇者本乎隊伍之別。後世誤傳、詭設物象。何止八而已乎。（『李衛公問对』卷上）

・太宗曰、朕與李勣論兵、多同卿說。但勣不究出處爾。卿所制六花陳法、出何術乎。靖曰、臣所本諸葛亮八陳法也。大陳包小陳、大營包小營、隅落鉤連、曲折相對。古制如此。臣爲圖因之。故外畫之方、内環之圓。是成六花俗所號爾。（『李衛公問对』卷中）

「八陣」について、李靖は、古人が八陣の法を秘藏するために仮に名づけたものに過ぎないとする。また、それにも関わらず、後人は天地風雲龍虎鳥蛇などの詭名を實體の陣と誤解し、その名に拘泥して、それらに具体的な物のイメージを付与していったと説く。このようにして、物象が設けられていく（竜や虎などの物象によつて

各部隊が命名されていく)のなら、何も、その名は(天地風雲竜虎鳥蛇という)八に止まることはない主張するのである。

また、以下には、主として歩兵・戦車・騎兵を前提とした論述が見られる。

太宗曰、伍法有數家。孰者爲要。靖曰、臣按、春秋左氏傳云、先偏後伍。又司馬法曰、五人爲伍。尉繚子有束伍令。漢制有尺籍伍符。後世符籍以紙爲之。於是失其制矣。臣酌其法、自五人而變爲二十五人、自二十五人而變爲七十五人。此則歩卒七十二人、甲十三人之制也。舍車用騎、則二十五人當八馬。此則五兵五當之制也。是則諸家兵法、唯伍法爲要。小列之五人、大列之二十五人、參列之七十五人、又五參其數、得三百七十五人。三百人爲正、六十人爲奇。此則百五十人分爲二正、而三十人分爲二奇。蓋左右等也。穰苴所謂五人爲伍、十伍爲隊、至今因之此其要也。(『李衛公問對』卷中)

この内、「先偏後伍」とは、『左伝』桓公五年に、鄭の莊公が魚麗の陳によって周の桓王の軍を防いだ戦いを指している。偏車(二十五乗を一偏とする)を前に布陣

し、独立歩兵部隊を後方に布陣するとの歩車共同作戦である。

太宗曰、車歩騎三者一法也。其用在人乎。靖曰、臣按、春秋魚麗陳、先偏後伍。此則車歩無騎。謂之左右拒。言拒禦而已。非取出奇勝也。晉荀吳伐狄、舍車爲行。此則騎多爲便。唯務奇勝。非拒禦而已。臣均其術、凡一馬當三人、車歩稱之。混爲一法。用之在人。敵安知吾車果何出、騎果何來、徒果何從哉。或潛九地、或動九天。其知如神、唯陛下有焉。臣何足以知之。(『李衛公問對』卷中)

ここでも、「車歩騎三者一法」について、「魚麗陳」を指摘する。これは、右の通り、春秋時代、鄭の莊公の創始した陳法で、車兵と徒兵との混成部隊であり、当時としては画期的な戦術であった。これについて李靖は、防御を主体とした正兵であり、「非取出奇勝也」と評する。いずれにしても、戦車と歩兵の活動を前提とした陸上戦が想定されている。

また、「晉荀吳伐狄、舍車爲行」とは、荀吳が車兵を廃して騎兵を登場させたことを指す。これについて李靖は、騎兵を活用した奇策であり、「唯務奇勝。非拒禦而

「已」と評するが、これも騎兵が積極的に活動できる陸上戦を前提としたものである。

いずれにしても李靖は、「混爲一法。用之在人」、「或潛九地、或動九天」と、車・歩・騎の三兵科の混成により、神出鬼没の戦闘が可能になると説く<sup>〔注〕</sup>。

一方、『李衛公問对』では、兵の形が水を理想とすることも説かれる。

太宗曰、五行陳如何。靖曰、本因五方色立此名。方圓曲直銳、實因地形使然。凡軍不素習此五者、安可以臨敵乎。兵詭道也。故強名五行焉。文之以術數相生相剋之義。其實兵形象水、因地制流。此其旨也。  
〔李衛公問对〕卷中)

太公望呂尚創始の兵陳とされる「五行陳」について、李靖は、これも詭道の一種で、「強名五行」（あえて五行の名を付けた）ものであると説く。そして、「兵形象水、因地制流」と水を高く評価するが、これは前述の通り、すでに『孫子』虚実篇に、「夫兵形象水、水之形、避高而趨下、兵之形、避實而擊虚、水因地而制流、兵因敵而制勝」と見えていた。

このように、『李衛公問对』では、陣形に関する論述

は多数見られるものの、それらは、いずれも陸上戦を前提とした正攻法を説くものであった。また、水に関する言及も、『孫子』同様、その柔軟性やエネルギーについて説くもので、水戦・水陣について解説するものではなかった。

但し、唐・李筌『太白陰経』や北宋・許洞『虎鈴経』といった百科事典的兵書になると、ようやく、戦具、戦法の一つとして水戦が明記されるようになる。例えば、『太白陰経』巻四には、「戦具」として攻城具、守城具、水攻具、火攻具、濟水具、水戦具、器械、軍装などの項目が見られる。その中の水戦具篇には、「樓船」「蒙衝」「戦艦」「走舸」「遊艇」「海鵠」などの各種船舶が列挙されている。『太白陰経』では、各種兵器・攻守城器械・城防設備・水軍戦船に関する論述が全体の一割を占め、その成果は、宋代の『武経総要』にも多く採録されている。

また、『虎鈴経』巻六にも、水戦、水利、水攻、過水、尋水脈、火力、火攻、守城、築城といった項目が立てられている。後世の百科事典的兵書になると、さすがに水戦に関する知識が集約されるようになったのである。銀雀山漢墓竹簡「十陣」の水戦は、それらの遙かなる先駆だったと評価できよう。

## 結語

以上、本稿では、銀雀山漢墓竹簡「十陣」を取り上げ、その最大の特徴として、水陣に関する一定の記述が見られることを指摘した。そして、古代の主要な兵書を概観してみたが、そこに水戦・水陣に関するまとまった思索は見られず、改めて「十陣」の意義が確認されることとなった。

銀雀山漢墓竹簡「十陣」の意義は、春秋戦国時代の多様な戦争形態を整理し、十の陣法にまとめて提示した点とにあるが、特に水戦に関する明確な記述が見られる点に最大の特徴がある。また、『李衛公問对』で問題にされているように、後世、陰陽五行説などに基づく呪術的な陣法も登場するが、銀雀山漢墓竹簡「十陣」は極めて合理的・人為的な発想に基づくものであり、この点、『孫子』『孫臏兵法』『呉子』『尉繚子』などと論調を同じくしている<sup>(注15)</sup>。

このような意義を持つ「十陣」ではあるが、その後、中国の兵学は、基本的には、こうした水戦・水陣に関する思索を深めていくことはできなかったと推測される。それは、中国の主戦場が陸上であったことによるであろう。中国が仮に海洋国家であったとすれば、古くから水

戦（海戦）の思想や技術が進展したと想像されるが、古代兵書の中で注目される水とは、せいぜい渡河作戦における川や湿地帯であり、原則は、やはり戦車・騎兵・歩兵による陸上戦であった。このことが、中国兵学における水戦の思想の停滞を招いたと推測される。

## 注

(1) 『銀雀山漢墓竹簡「貳」の「後記」』によれば、第二輯の定稿は、一九八一年に完成していたという。とすれば、その定稿が刊行されるまでに二十八年かかったことになる。

(2) 原文は「觀庫」。編者（銀雀山漢墓竹簡整理小組）はこれを「觀卑」と釈読しており、ここでもそれに従う。

(3) 以下、原文の引用に際しては、『銀雀山漢墓竹簡「貳」の釈文および注釈等を参考にし、最終的には筆者が確定した文章を掲載する。また、竹簡が欠損して文字を確認できないが、内容から、編者（銀雀山漢墓竹簡整理小組）が補った箇所には【】記号を附す。なお、表示できない古文字については、[○+△]のように分解して示す。

(4) 第一五三一簡背面に記された篇題である。

(5) 以下、段落の冒頭に、「田形墨点・」が打たれており、「十陣」が簡条書きを意識していたと推測される。但し、必ずし

も円形墨点が確認できない箇所もある。

- (6) 「疏陣者、所以「口十丈」也」の難字については、金谷治「孫臏兵法」(ちくま学芸文庫、二〇〇八年)が「吠」の異体字とし、「脱」(脱離の意)の仮借とみるのに従ったが、林志鵬「讀《銀雀山漢墓竹簡》「貳」》「論政論兵類札記」(『簡帛研究二〇一三』)は、「呉」の誤りとし、「虞」に訓んで、欺く、あるいは、防備の意とする。

- (7) 「鈎楯菴祖」は難解な箇所である。金谷治「孫臏兵法」は「鈎楯」については、曲がった形や真っ直ぐな形と解し、「菴祖」については、水戦の道具の名であろうとする。これに対して、林志鵬「讀《銀雀山漢墓竹簡》「貳」》「論政論兵類札記」は、「鈎楯」「菴祖」とも、水戦具であろうと推測する。

- (8) 原注によれば、本篇に現存している文字と欠字を補うと、計七五〇字となり、この表示より三十七字少ない。但し、「圓陣之法」の解説文は完全に欠落しているので、それが約一簡分あったとすれば、おおよそその数値となるであろう。

- (9) 銀雀山漢墓竹簡「論政論兵之類」の成立時期については、拙著『中國出土文獻研究—上博楚簡與銀雀山漢簡』(台湾・花蘭文化出版社・古典文獻研究輯刊第十五編、二〇一二年)、および『竹簡學—中國古代思想の探究—』(大阪大学出版会、二〇一四年)参照。

- (10) 但し、同じく『越絶書』佚文には、「越爲大翼、小翼、中翼、

爲船軍戰」(『初学記』卷二十五所引)、「越爲大翼、中翼、小翼之船、以水戰」(『事類賦注』所引)とあり、呉ではなく越のこととされているが、恐らく呉の誤りであろう。

- (11) 以下、原文の引用に際しては、『銀雀山漢墓竹簡「壹」』の釈文および注釈等を参考にし、最終的には筆者が確定した文章を掲載する。また、竹簡が欠損して文字を確認できないが、内容から、編者(銀雀山漢墓竹簡整理小組)が補った箇所には【】記号を附す。

- (12) 『曹沫之陳』の詳細については、浅野裕一「上博楚簡『曹沫之陳』の兵学思想」(『戦国楚簡研究二〇〇五』)、『中国研究集刊』別冊特集号第三十八号)、二〇〇五年。後、湯浅邦弘編『上博楚簡研究』(汲古書院、二〇〇七年)に再録)参照。

- (13) 『尉繚子』の成立時期については、拙著『中国古代軍事思想史の研究』(研文出版、一九九九年)参照。

- (14) 『李衛公問对』は、漢代から三国時代の基本的な軍制について、「觀漢魏之間軍制、五車爲隊、僕射一人、十車爲師、率長一人。凡車千乘、將吏二人。多多做此」と解説している。

- (15) 中国古代の兵学は、『孫子』を代表とする権謀術数的兵学が主流であったが、天体や雲気の観望等によって勝敗を予測しようとする呪術的兵学も大きな影響力を持っていた。この点の詳細については、拙著『戦いの神—中国古代兵学の展開—』(研文出版、二〇〇七年)参照。